組合員の「思い・願い」を受け止め、自己改革に取り組みます。

ＪＡハイナンは、自主・自立の協同組合として、「農家組合員の農業所得の向上」と「地域社会への適切なサービス提供」を柱に自己改革に取り組んでいます。

農業所得の向上については、ＪＡの強みを生かし、生産部会員や「ほうせん館」出荷者等を重点に取り組んでいます。

また、地域に根ざした協同組合として、信用事業、共済事業、生活関連事業（ガソリンスタンド、葬祭事業等）など様々な事業や活動を行い、農家組合員、准組合員さらには地域の方々のくらしに必要なサービスを提供しています。地域で様々なサービスを利用していただくことで、営農指導や農業関連施設への投資などが可能となり、農家組合員の農業所得の向上につながっています。

ここからは、これまでの当ＪＡの取組状況についてご報告します。ＪＡは、農業者を中心とした組合員が「力を合わせて」共通の願いをかなえるために組織した「協同組合」です。改革の取り組みは、組合員の皆様に評価いただいて初めて成果となります。ＪＡハイナンは、話し合いを通じて組合員の「思い・願い」を受け止め、今後とも自己改革に取り組んでいきます。

©みんなのよい食プロジェクト

「思い・願い」を受け止める話し合いの経過

自己改革の取り組みにあたっては、話し合いを通じて組合員の「思い・願い」を受け止めてきました。今後も様々な機会を通じて話し合いを行うことで、自己改革の実践や成果の共有に努めます。

●生産部会との話し合い
日　程：令和元年８月～10月
対象者：柑橘委員会役員、レタス委員会役員、サニー委員会役員、花き委員会役員
意　見：集出荷場の設備更新、品目別チームの活動について、産地の維持・ＰＲなど
対　応：
・営農助成事業により、新規作物の導入や規模拡大、農地集積や暗渠排水工事等に対しての支援を行いました。
・量販店やスーパーマーケットへの販売に関しては、担当部署で連携し実施計画を進めています。
・出向く体制を引き続き実践し、個別訪問指導や適切な情報提供向上に努めます。

●女性部と常勤役員の話し合い
日　程：令和元年11月18日（月）
対象者：女性部員
意　見：女性部加入によるメリット等の認知向上、店舗再編成による活動への影響など
対　応：
・女性部加入の募集については、募集時期にポスター等を支店等へ掲示していきます。農家でない方も加入できることをＰＲしていきます。
・施設の利活用については、公共性や地域への貢献、影響等を考慮して検討していきます。

●第二次店舗再編成及び営農経済改革説明会
日　程：令和２年　【榛　原地区】２月25日（火）、３月３日（火）
【吉　田地区】３月３日（火）
【御前崎地区】３月13日（金）
【相　良地区】３月19日（木）
対象者：総代500名
内　容：店舗再編成及び営農経済改革について
意　見：店舗再編成・営農経済改革の目的、事業利益、施設・土地の利活用・新築など
対　応：
・地域に密着し皆様のご要望を聞くため「出向く体制」（渉外活動）のさらなる強化をします。
・５ＪＡ事業連携協議会（令和元年７月発足）で連携し、売り場の拡大や品ぞろえの充実を図り農業所得向上につなげます。
・統括営農経済センターの建て直しを検討します。
・物流改革や肥料等の銘柄集約を検討します。
・ハウスリース事業を検討します。

レタス委員会・サニー委員会役員との意見交換会

農家組合員の農業所得の向上

「組合員の経営基盤強化のために　営農支援助成事業」

取り組み内容

組合員の農業経営の改善・発展を支援することを目的として助成措置を実施しています。
規模拡大・基盤強化など農業経営や新しく取り組む複合栽培のために必要な農業機械や資材代、耕作地の排水整備費用等を助成し、組合員の栽培管理の効率化と栽培環境の整備等を図ります。

組合員の声

・耕作地が整備され、栽培管理が楽になった。
・初期投資が軽減され、新規作物に取り組みやすくなった。

成果

経営規模拡大、新規作物栽培などに貢献した。
★利用件数：132件

「ハイナン管内の農産物ＰＲへ！　農産物販路拡大」

取り組み内容

生産部会の機能発揮による農業経営力向上を目的に、ハイナン管内の農産物のＰＲと販路拡大を行っています。他ＪＡとの地域間提携、学校給食へほうせん館の野菜の提供等を行っています。
令和元年８月より長野県小布施町にある直売所「小布施屋」と産地間提携を結び、店頭即売会を開きました。

組合員の声

・ＪＡハイナンの名前を管外で見かけるようになった。
・ほうせん館での取扱商品が多くなった。

成果

販路拡大が進み、農業所得向上と
農産物の知名度向上へつながった。
★取引先：
　小布施屋、ＪＡ御殿場など

「耕作放棄地対策へ　農業経営事業の開始」

取り組み内容

平成30年７月よりＪＡハイナン自らが茶園管理する農業経営事業を開始しました。担い手が不足している地域において、組合員の農業経営を補完し耕作放棄地を有効活用します。

組合員の声

・手放そうと思っていた茶園を耕作放棄地にすることにならなくて良かった 。
・営農担当職員の技術習得に期待する。

成果

直営茶工場へ生葉を出荷する組合員からの
借入面積が増加し、農地保全につなげた。
★組合員からの借入面積：
　約4.6ヘクタール（前年比250％）

地域社会へのサービス提供

「皆様の暮らしをフォローします　“出向く体制”」

取り組み内容

店舗再編成・機構改革に伴い、訪問回数の増加と迅速な対応に努め、出向く体制を強化し、皆様に引き続き安心してご利用いただけるよう努めます。

【金融部門】

質の高い渉外活動により組合員・利用者との接点を強化し、さらなる利便性の向上を図ります。

【共済部門】

業務品質の高度化、農業リスク診断の実施により、最良のサービスと安心・信頼の保障を提供し、契約者・利用者の安心・満足度向上に努めています。

組合員（地域住民）の声

・支店が遠くなっても、不便さを感じないようにしてほしい。
・今まで通り地域に密着したサービスを続けてほしい。

成果

【金融部門】

訪問活動の強化（インストラクターによる同行指導・年間48回）とネットバンクの普及（新規契約件数584件・計画対比117％）に努めた。

【共済部門】

３Ｑ訪問活動による「安心チェック」を行い、フォロー活動の強化に努めた。
（ライフアドバイザーによる保障内容点検活動・年間9,058件）

「女性の仲間づくりの場　ハピネス倶楽部へとリニューアル！」

取り組み内容

女性部では、若い世代の仲間づくりの場としてハピネス女子大学、さらに卒業生によるＯＧ会を開催していましたが、令和元年８月にハピネス倶楽部としてリニューアルしました。

参加者の声

・子どもと一緒に参加できる活動が増えて嬉しい。
・途中参加も可能になったので、入りやすくなった。

成果

若い女性のＪＡファンづくりと仲間づくりを支援した。（参加者18名）

「農家の方々の労働力を支援します　無料職業紹介所」

取り組み内容

労働力支援のため、平成29年１月から無料職業紹介所を開設し、求人・求職の募集を行なっています。県下ＪＡグループと連携した求人サイトにも参加し、事業のＰＲを進めています。平成31年度は障がい者雇用の実現、外国人労働者の採用検討をしました。

求人者の声

・農業経営の規模拡大のため雇用をしたい。
・実際に働くことで農業のことを理解してもらいたい。

成果

地域農業の振興のため、規模拡大希望の農家組合員に役立った。

★求人（農家）９件、求職（働き手）19件、マッチング３件

新聞への掲載記事

当ＪＡの自己改革の取り組みは、広報誌のほかマスコミを通じた情報発信にも努めています。これまでに新聞に掲載された内容を一部抜粋して紹介します。なお、「※」がついているものは次ページ以降に記事を掲載しています。

【掲載記事抜粋】

・令和元年７月５日（金）	中日新聞	学生の活躍願って
・令和元年７月12日（金）	日本農業新聞	ハピネス女子大学第五期生　卒業式
・令和元年７月18日（木）	日本農業新聞	利用が倍増　営農助成事業（※）
・令和元年８月３日（土）	中日新聞	静岡牧之原茶「望」ＰＲへ
・令和元年８月11日（日）	日本農業新聞	ポスター 一新
・令和元年８月14日（水）	日本農業新聞	茶と複合　白ネギ産地化へ（※）
・令和元年８月15日（木）	日本農業新聞	産地間提携アピール　ＦＭにて軽井沢野菜を販売
・令和元年８月22日（木）	日本農業新聞	農地中間管理機構関連農地整備事業　県内初採択
・令和元年８月24日（土）	日本農業新聞	女性大学を刷新　「ハピネス倶楽部」開講
・令和元年９月26日（木）	日本農業新聞	省力化や効率化 実証へ　スマート茶業“稼働”（※）
・令和元年11月20日（水）	日本農業新聞	業務効率を向上　通年で服装カジュアル（※）

【掲載記事】

■令和元年７月18日（木）　日本農業新聞　　利用が倍増　営農助成事業

営農助成利用が倍増

静岡県のＪＡハイナンが組合員の新規作物導入などを支援する営農助成支援事業の利用件数が、２０１８年度は１７９件となり、自己改革の一環として拡充した15年度の２倍以上に拡大した。主力の茶を軸にした経営の複合化や規模拡大などに貢献している。

静岡・ＪＡハイナン

支援事業を活用し経営規模の拡大を進めた加藤さん㊧とＪＡ職員（静岡県牧之原市で）

茶を軸に複合化、拡大貢献

同事業は、01年度に始めた。15年度からは自己改革の一環と位置付け、拡充を進めてきた。「複合経営導入支援」「機械・資材等購入助成」「農地耕作条件改善」の三つのメニューがある。年度ごとに新対策を加え、今年度は全部で15項目ある。

複合経営導入支援事業は、新たに作物を栽培する際に初年度にかかる肥料・農薬や種苗の購入費や、ハウスの建設・増設・改修、新たな作物に取り組むための茶樹の抜根対策などに助成する。

機械・資材等購入助成事業は、規模拡大や経営基盤強化に必要な農業機械や資材代などを助成する。農地耕作条件改善事業は、裏作レタスの生産性を高めるため、水田に暗きょ排水を整備する費用を助成する。

全体の利用件数は15年度が74件、16年度が99件、17年度が183件。助成金額の総額は、18年度は前年度を3割近く上回る1394万円となった。

同事業を利用して複合経営を始めた面積は、ＪＡが提案に力を入れたレタスと白ネギの二つの初年度分だけでも、過去10年間で11㌶超に上る。

組合員の加藤達実さん（36）は茶との複合で、新規複合作物促進対策支援を利用して白ネギ栽培を始めた。加藤さんは「規模を拡大しようと思ってもかかる費用は大きく、簡単に手を出せない。助成で初期費用が軽減されたので、新規作物の導入に取り組みやすくなった。もっと多くの野菜に挑戦し、規模拡大していきたい」と話す。

ＪＡの田中義孝常務は「今後も組合員との意見交換会や日々活動している営農経済担当職員が聴取した内容を中心とし、要望に応えられるよう助成内容を検討していきたい」と話す。

（静岡・ハイナン）

■令和元年11月20日（水）　日本農業新聞　　業務効率を向上　通年で服装カジュアル

通年で服装カジュアル 業務効率を向上

静岡・ＪＡハイナン

ノーリボンで接客する職員（静岡県牧之原市で）

【静岡・ハイナン】ＪＡハイナンは、働きやすい職場づくりを目指し、職場のドレスコードを見直した。5～10月のクールビズ期間に限定していたノーネクタイ・ノーリボンの「ビジネスカジュアル」を、11月から通年で始めた。県内のＪＡでは初の試み。楽な格好で仕事をすることでストレスを減らし、業務効率を上げることを期待している。

これまでは、高温の季節でもクールビズ期間を除き、男性はスーツにネクタイ、女性は制服にリボン着用が原則だった。

最近、地方銀行や信用金庫など金融機関やさまざまな企業が「ビジネスカジュアル」をきっかけに改革を進めている。ＪＡでは、服装の自由度を高めることがダイバーシティー（多様性）の推進に拍車を掛けると考えた。働きやすさを追求し、ドレスコードを見直した。

渉外活動や会議などＪＡから外出するときは、従来通りネクタイやリボンを着用する。

ＪＡの大石直司組合長は「職員に自由闊達（かったつ）と前例打破を意識させ、柔軟な発想や新しい取り組みなど、活力ある職場づくりを目指したい。この取り組みが私たちの新しい風になることを期待している」と話す。

■令和元年８月14日（水）
日本農業新聞
茶と複合　白ネギ産地化へ

茶と複合 白ネギ産地化へ

静岡県のＪＡハイナン白葱（しろねぎ）委員会が今年から力を入れている夏どりネギの収穫が、終盤を迎えている。同委員会は2017年に新設し、現在は設立当初の15人から24人に増えた。管内の茶との複合栽培を始め、産地化の実現を目標に活動している。

茶を伐根し白ネギ栽培を始めた圃場で夏ネギを収穫

静岡・JAハイナン委員会

初の夏どり計画通り

これまでは冬どりネギだけ栽培していたが、冬どりネギの出荷量が増え、安定したことをきっかけに、今年2月の定植から夏どりネギ栽培を本格的に始めた。栽培面積は4月までで15Oㄱと昨年に比べ約4倍となった。冬ネギも441ㄱと前年より50ㄱ増加している。

今年は病害虫被害が抑えられ、収穫は計画通り進んでいる。9月中旬まで続く収穫は、1ㄱ3㎏として3000ㄱ出荷する。

7月中旬に開いた同委員会総会で、JA静岡経済連中部支所みかん園芸課の井谷靖徳課長は「最近は生食の需要が安定してきているため、出荷量増加に期待する」と話した。夏どりネギは農薬・管理の面で多くの違いがあり、難易度がやや高いのが課題。県志太榛原農林事務所や経済連中部支所、名古屋市場関係者を招き、栽培講習会を開いた。

JAで白ネギの営農指導を担当している東部営農経済センターの鈴木孝司代理は「規模拡大を図りつつ、消費者に好まれる産地形成を進めたい」と話した。

（静岡・ハイナン）

■令和元年9月26日（木）
日本農業新聞
省力化や効率化 実証へ　スマート茶業“稼働”

JAハイナン管内 スマート茶業“稼働”

省力化や効率化 実証へ

県が国の補助で取り組む、スマート茶業実証事業が動き始めた。JAハイナン管内では、2法人が作業記録ツール「アグリノート」と、カメラを備えたフィールドサーバー（気象ロボット）を導入。作業記録を開始するとともに、茶園に設置したカメラで、茶工場に居ながら様子を観察できるようになった。生産者は省力化や生産性向上に期待している。

茶園で作業記録の入力方法を説明する山本さん

茶工場のパソコンで茶園の様子を確認する植田さん

茶園環境“見える化”

ツールや装置は、5人が34㌶で操作するシステムで、グーグルマップの地図上に茶園を登録し、茶園の位置を見える化したのが特徴だ。

茶園で作業開始時刻と終了時刻などを入力し、農作業時間、農薬、肥料、使用農機の種類などを記録し、データを経営分析に生かす。

管理統一し品質向上期待

エコグリーン勝間田では10人が8月中旬から使い始めた。茶夢茶夢ランド菅山園でも7人が使う。エコグリーン勝間田組合長の山本博昭さん（62）は「出荷者全員が互いの記録を閲覧できる」と説明する。「情報を共有し工場のフル稼働に生かしたい」と期待する。

一方、フィールドサーバーは法人に各1台設置した。気温と降水量を測定するが、現在は画像を1日5回撮影している。

茶夢茶夢ランド菅山園代表の植田善久さん（51）は、茶園の見回り労力削減に期待する。

植田さんは出勤時に見回る他、摘採や防除は担当者が数日かけて巡回し作業日程を決めている。「従業員の高齢化が進む中、巡回時間を半分程度に削減したい。併せて画像を利用し技術の継承に生かしたい」という。

画像は、人工知能（AI）を利用した生育ステージの解析にも利用する。ドローン（小型無人飛行機）の画像と合わせ、摘採期の判断を茶工場で統一し品質の均一化を目指す。同JA管内に今後約40カ所のフィールドサーバーを設置する。

JA営農企画課の弓田康詞課長代理は「スマート農業で省力化し、データを利用し、持続可能な産地にしたい」と話している。